依然高い脳卒中死亡率

日常生活の心がまえが大切

死因の実態

昭和49年1月～12月までの黒埼町の死亡者は105名です。死因を分析してみると、脳卒中、癌、事故、老すい、心臓病の順になっており死因の半分以上は成人病で脳卒中28名癌19名心臓病7名高血圧4名となっております。

○脳卒中

脳卒中は40才以上の人に起りやすく脳の血管が破れたり、つまったりすることによって意識がなくなり、手足がしびれ、麻痺したりしてひどい場合はそのまま死亡する病気です。昨年脳卒中でたおれた人は40名おり、そのうち死亡者は28名で生存者は12名でした。死亡者28名について分析してみると、65才以上が21名で、65才未満が7名です。その内訳は男子9名、女子19名となっています。どんな死亡のしかたをしているかをみると(1)一番中風で死亡した人11名、二番中風で死亡した人17名

(2)季節は寒さに向う10月頃から春先の3月頃までに23名死亡しております。

(3)過去5ケ年間全く検診をうけたことのない人が20名、時々うけた人が4名、毎年定期的にうけた人は4名です。

(4)血圧が高かった人は18名

(5)血圧が高く、薬を続けてのんでいた人11名、時々又は全く医師に受診しなかった人17名

（脳卒中でたおれ、体の不自由な人は黒埼町では現在96名おります。昨年たおれ生存している12名について分析してみると、65才未満10名65才以上が2名でした。65才未満10名について、年令別にみると、50代が5名で一番多く次が40代3名、30代1名60代の順になっております）

○癌

癌は脳卒中に次で第二位の死亡率をみせています。年令的には中年以降に多く発生します。男女とも40才をすぎたら胃がんを女性は35才すぎたら子宮がんをとくに注意する必要があります。がんはどうしておこるか、その原因は残念ながらわかっておりません。死亡した19名について、みると

(1)65才未満4名で、65才以上15名です。

(2)胃癌は8名でもっとも多く次が肝臓癌、膵臓癌、肺癌、直腸癌の順になっております。

○心臓病

心臓病には生まれつきの心臓病のほかに成人病としての狭心症、心筋硬塞、心不全などがあります。心臓の筋肉に血液を送る動脈が硬化をおこし血液の通り路が狭くなると、必要な血液を供給できなくなり、心臓の筋肉の栄養障害が起こります。これがもとになっておこる発作性の病気を狭心症といいます。

冠状動脈が硬化して血液の通り路が狭くなっているところへ、血液のかたまりなどがつまったりするとそれから先の心臓の筋肉は死んでしまいます。これを心筋硬塞といいます。

黒埼町ではこのような心臓病で6名の方がなくなっております。発病と同時に急性死しており、高血圧、糖尿病、脳卒中の合併症もありました。

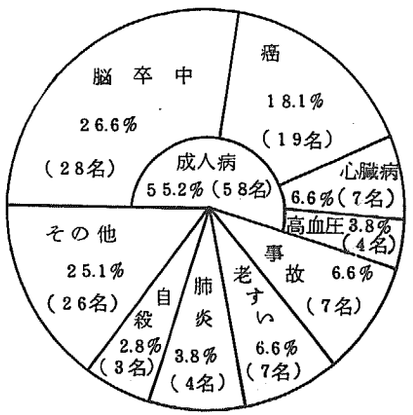
最近の平均寿命は男子七〇、七才、女子七六、〇二才と年々生命は延長しておりますが、黒埼町では若くして働きざかりの人が脳卒中や癌、心臓病で死亡する人がめだって来ているように思われます。これらをできるだけ少なくするためには自分自身が自分の健康を確認しておかなければなりません。

それには**年一回の健康診断**をうけることが大切です。

4月からはじまる**総合検診**（血圧、レントゲン、胃部、婦人、貧血検査）には皆んなが受けるよう心がけて下さい。

保健衛生課

年1回の健康診断は必ず受けましょう



欧州も厳しい農業情勢とか

農業委員会が勉強会を!!

去る一月三十日農業委員会事業として昨年八月十日から約二週間の予定で欧州農業を視てこられた新潟市の奥田農業委員会長を招請して講演会を開いて勉強した廻られた国はギリシヤ、イタリア、フランス、スイス、イギリス、オランダ、西ドイツ、スエーデンで私どもは外国農業といえば無限の農地で大型機械を駆逐し生活も豊かで農政も確立され総てが文化的な先進国であることを想像していたが、こと農政はどこの国もきびしく世界の農業を知らなすぎるのが実態で非常に有益であった。

欧州文明の発祥地と云われるギリシヤなども、農業生産は貧しく国内自給は極めて深刻で不安のようだ。

それがため、国民生活もきびしく豊とはいえないが、国民性は人間優先で一杯のコーヒーでのんびり一日を楽しみ国力は観光に支えているとのことである。またスエーデンは耕地30%牧野70%で作物は主に麦と穀物で農家は概して秋に一部売るだけで殆ど乳牛、飼育牛の飼料にあてているそうである。耕地は国から融資をうけて求め五〇年から七〇年の償還であるそうだ。食糧自給は八〇%を目標で国で調整しているそうであるが近年は生産過剰気味で農作物の価格の不安定で農家生活は極めて苦しいとのこと、社会補償は充実している反面税金が非常に高いそうで、そのことが逆に国民に勤労意欲を喪失せているといわれている。

フランスでは野菜作り農家を訪れたが国からの農業に対しての助成は一切なく、農家の自力により経営の改善をはかっているが農作物の価格補償政策がないため昨年は生産過剰で採算がとれず、このままでは生活が成立たずストライキで自衛策を打つより外ないと農家が訴えていたという。

イギリスも国内資源に貧しい国情なので最近は観光国に変身して国力の増強をはかっているとのこと。

また、この国の土地制度は長男相続で経営主が死亡すると長男がたとえ他の職業についていても大方家へ戻って後継ぎをする慣行になっているが後を継がない場合国に寄附することになっており、その波及からすばらしい公園広場は至るところに目を見はらせるものがあり、公害日本にとっては羨ましいことだという。

その外有益な話を多く勉強させて頂いたが日本農業も勿論多くの問題をかかえているが、やはり日本は生活、文化、経済とも恵まれており経済大国なのかなと漏らされた。只あくまでも農は国の基であり、不足過剰の過渡的な現象は何れの国にも及ぼすものであるが、自国の食糧自給施策の確立は各国共通の理念であったことを強く印象づけられた。

日本農業も近年の世界的食糧事情の不安定、悪化などの高い判断に立って食糧を第二の石油とされることとならないよう考えさせられた。足らなければ何時でも買えるなど安易な考え方は極めて危険である。米の生産調整施策も今年で終りであると同時に農業は新しい時代に直面した講演をとおして一にも二にも食糧自給制度の確立を急げと感じたのは敢て私一人であったろうか。

水がぬるるみ、畦ぬりも始まった昨年に引続き良質米増産に、また新しい闘志を燃やしたい。

熱心に耳を傾ける中核農業者

「私も一言」

懐かしい「黒松」町の木に想う

先般、町報六十九号を読ませて載きましたが、当町の木は黒松になったとありました。そこで昔の想い出がうかんでのだ書いてみました。

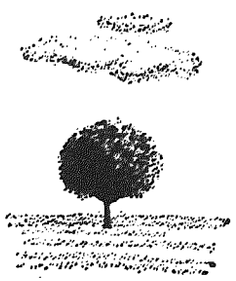
大正十二年五月、保苅未五郎さんと二人連で五十嵐山の松林に行き、一本手こぎにして紙に包み家に帰りて土間に植付けて、必ず成長してくれと、ジョーロを持つこと怠ずに　漸く青葉を見たその時の喜び何かばかり、一年後に移植し、三、四年で、一、二、三尺、これ大丈夫と庭の場所を選定して植付けまして一生死なんで頼むぞと言った言葉が今にも思われる。今では皆、生々堂々として元気

次にサザンカ、大正十三年秋十五年位の物を買い求め、今では六、七〇才位と思います。老木季節来たれば若木に負けず花盛り、年はとりても気持ちは同じと古人の言われたことであります。

次にヒマラヤ杉、以前インドに行った時にしました、イチヨウは四、五年前に植まして、四、五尺位

次にツゲは、五、六年前、三十才位の物で四十年近いものと思われます。

金木犀は一昨年買求め、お前も枯れずにがんばってくれと植えましたが運つたなくして枯れてしまいました。これも古人の言われた事、始め有れば終り有り、形有る物ほれ有り、生有れば死有りと

今度は別の話になるが、江堀の端に六七十年位経つタモノ老木がありまして、垣の中ころより西に向いて首を出し、七、八年前、七八尺位のところから切りましたところが、二本の枝木が出、毎日、日暮れになりますと今日の一日の無事をお祈し、また朝には青葉に両手を合せ拝みます。草木さえものべたとおり、まして吾々は人間なり、草木に催促せられ申訳ありません。今後は忘れないで、水や肥料をやり枯れさせないようにしたい。

※一部訂正させて頂きましたがこの文章は八十九才になられた、黒鳥二の本間権松さんが書かれたものです。